

ハリジャンカル・パルサーイーの 『王妃ナーグパニー物語』

田 中 敏 雄

ここでは、ハリジャンカル・パルサーイー (Harishankar Parsai, 1924. 8. 22~)¹⁾の小説『王妃ナーグパニー物語』²⁾を取り上げることとする。パルサーイーが自らの立場を明確にし、読者を発見し、自らの文体を確立したのはいつか、というのが問題関心の出発であり、それは『王妃ナーグパニー物語』に見られるというのが結論である。

〈7, 8年前, ムンシー・インジャーアッラー・カーンの『王妃ケートキー物語』を読んだ〉³⁾, とパルサーイーは序文で語っている。序文執筆の日付はない。『作品集』第2巻に従えば、執筆年代は1962年となっている⁴⁾。ラージカマル版ポケット・ブックでは、著作権取得年は1961年とあるが刊行年は不明である⁵⁾。

執筆年代を確かめるために本文を検討することとする。主人公の幼友達が県長官補の面接試験を受ける場面である。主人公の友人ということで採用は決定済みである。主任面接官は、主人公のご機嫌を伺い、2人目は朝食のことを尋ね、3人目が質問する。〈昨近、町ではどんないい映画が上映されているかね?〉〈『第14日目の月』、ワヒーダー・ラヘマーン、グルダット、ジョニー・ウォーカー、ヘレンなどが出演しています〉⁶⁾ この『第14日目の月』の封切は1960年である。⁷⁾さらに、大団円近い場面で、何人の子宝に恵まれるかの質問に占星家は答えている。〈いまいくつかの国は人工衛星を作って打ち上げています。地球を回っているのです。我々の算出に妨げとなっています〉⁸⁾これは、1957年の人工衛星スプートニク1号と1958年の人工衛星工エクスプローラー1号を示すものである。以上のことから、50年代の後半から60年代の初頭にかけて、インジャーアッラー・カーンの『王妃ケートキー物語』⁹⁾に触発され、ファンタジー、途方もない空想、想像力で構成、執筆されたものとしてよい。

ウラジラトンダースの校訂版¹⁰⁾によって、『王妃ケートキー物語』の梗概を示すことにする。

ウダイバーン王子 (Kunvar Udaibhan) は狩に出る。牡鹿を追ううちに日没となる。マンゴーの森で、4,50人の娘たちがブランコをしている。そのうちの1人と目が合う。これがケートキー王女 (Rani Ketki) である。娘たちはウダイバーンに立ち去るようというが、心の中でウダイバーンを想うようになったケートキーは、早朝立ち去るようがいい、樹の下で夜を過ごすことを許す。深夜、娘たちが寝入ると、ケートキーは幼友達マダンバーン (Madanban) を起し、ウダイバーンに会いに行く。たがいに身分を明かし、指輪と誓文を交換する。

城に戻ったウダイバーンは恋煩いのため飲食を忘れ、部屋に籠ったままである。心配する両親に手紙で打ち明ける。父スーラジバーン王 (Raja Surajbhan) は、吉祥の時を選び、結婚申し込みのためパラモンを送る。ケートキーの父ジャガトパルカース王 (Raja Jagatparkas) は申し出を拒み、使者を暗室に幽閉してしまう。

両国は戦争準備を始める。ジャガトパルカース王は、カイラース山に住む師ジョーギー・マヘーンドルギル (Jogi Mahendargir) に助けを求める。錬金術、飛行術、変身術など超能力を持つマヘーンドルギルは900万の弟子たちを卒いて戦場に現れる。ウダイバーンとその両親を鹿に変身させ森へ放逐し、スーラジバーン王軍に砂嵐、雹、蝗の群で襲わせ全滅させる。

マヘーンドルギルはジャガトパルカースに虎皮と聖灰を与える。虎の毛一本を火に焼べると、ただちに救助に現れ、聖灰を目に塗ると、透明人間になるというのである。ケートキーは隠れん坊のためにねだって試し、2週間後、ウダイバーンを探すために家出する。嘆き悲しむ両親は、国政を委ね、ケートキーを探しに山へ行く。マダンバーンを呼び出して聖灰をすべて与え、ケートキーを探すよう依頼する。一方、虎の毛を火に焼べてマヘーンドルギルを呼び出す。ウダイバーンとその両親を鹿から元の姿に戻し、ウダイバーンを自分の息子として結婚させると約束する。マヘーンドルギルは900万の弟子たちと森を探索するが見つからない。そこでインダル (Indar) 神に助けを求める。

月光の下でインダル神とマヘーンドルギルが音楽を聞いていると、何千万の鹿が集って来て音楽に耳を傾けている。マントラを唱えながら水滴を振り掛けると、ウダイバーンとその両親は元の姿に戻る。また、水瓶の水とマントラで死んだ将兵は甦る。

インダル、マヘーンドルギル、ウダイバーンとその両親は飛行船に戻る。インダル、両王の命令で、国を挙げて結婚式の準備が始まる。式にはすべての神々が

(30) ハリジャンカル・バルサーイーの『王妃ナグパニー物語』(田 中)

参列し、祝福を与える。王妃ケートキーのウダイバーンへの一途の愛に、すべてが屈服するというのである。

バルサーイーはこの物語をどのように扱ったであろうか？ 登場人物から見ることにする。ウダイバーン王子はアストバーン王子 (Kunvar Astbhan) に、王妃ケートキーは王妃ナグパニー (Rani Nagphani) に変える。ウダイバーンは「日出」、アストバーンは「日没」を意味する。ケートキーはタコノキ科の芳香性の花 (*Pandanus odoratissimus*) で、ナグパニーは蛇の鎌首状のサボテン (*Cactus indicus*) である。それぞれに幼友達が配される。ウダイバーンにはないが、アストバーンにはムフトラール (Muftlral)。ムフトは「無料、たかり」を意味する。マダンバーンは、愛の神カーマの矢を意味し、カレーラームキー (Karelamukhi) は「ニガウリの口をした」を意味する。3人の王を登場させている。ラーカルスインフ王 (Raja Rakharsinh), バエビートスインフ王 (Raja Bhaybhitsinh) とニルバルスインフ王 (Raja Nirbalsinh) であり、それぞれ、「締まり屋」、「怯えた」、「非力」を意味する。ジョーギー・マヘーンドルギルはジョーギー・プラパンチギリ (Jogi Praranchgiri) になる。ここで、プラパンチは、「虚偽」を意味する。新しい人物も登場させている。首相ゴバルダンダース (Mukhyamaty Gobardhandas) と政治家バイヤー・サーブ (Bhaiya sa'b) である。1952, 57年の総選挙で登場した政治家である。親族名称「兄さん」は、敬称でもあり愛称でもあり、蔑称ともなりうる。

物語構成の形式は、『王妃ケートキー物語』をほぼ踏襲している。〈ジョーギー・マヘーンドルギルがカイラース山からやって来ること、そして王子ウダイバーンとその両親を鹿に変えてしまうこと〉¹¹⁾に倣って、15章で構成されている。テキストにはないが、便宜上番号を付ける。1) 王子アストバーンが不合格になること、そして自殺の準備をすること 2) 王女ナグパニーが失恋すること、そして自殺の準備をすること 3) ナグパニーとアストバーンが出会うこと、そして心が乱れること 4) 別離の苦しみに身心を焦がすこと、そしてさまざまな方法で心を慰めること 5) 恋の病に罹ること、ペニシリンが注射されること 6) 恋文を送ること、そして秘密が露見すること 7) ムフトラールの面接、そして県長官補となること 8) ニルバルスインフ王の結婚申し出 9) ジョーギー・プラパンチギリがやって来ること 10) 王とムフトラールが話すこと 11) 首相と会うこと 12) バイヤー・サーブと面会すること、そして靈魂のありか

を突き止めること 13) 靈魂を捕えること、そして首相に渡すこと 14) 結婚話が進行すること 15) 結婚すること、そしてすべてのものが幸せに暮らすこと

4回も学士試験に不合格となったアストバーン王子、5回も失恋したナーグパニー王女は自殺を決意し、それぞれの幼友達に自殺方法の研究を命じ、ナルマダー(Narmada)河のベラーガート(Bheraghat)の滝壺に入水自殺することにする。決行前にそれぞれの天幕から出た二人は出会い、恋に陥る。

紆余曲折を経て、第11章でアストバーンの父パエビートスインプ王は入札を決意する。ナーグパニーの父ラーカルスインプ王に落札させなければならない。首相ゴーバルダグダースに面会し、取引きをする。首相のいうことなら王は承知するからである。首相は、政敵バイヤー・サーブの靈魂のありかを突き止め、捕えて引き渡せば落札させるという。結局、捕えて引き渡し、アストバーンはナーグパニーと結婚するのであるが、ここで、つまり、第12章で物語の伝統的モチーフ(Kathanak rurhi)が効果的に用いられる。『王妃ケートキー物語』では、狩、出会い、戦争、変身術など物語の伝統的モチーフが多用されているが、『王妃ナーグパニー物語』では、この鳩のつがいの対話のほかは見られない。

靈魂のありかを突き止めることについて、ムフトラールはアストバーンに説明する。〈政治屋たちの体の作りは私たちと別なのです。あるものは自分の靈魂を体の中に、あるいは、外のどこにでも置くことができます。ある指導者たちの心は胃袋にあり、あるものの心は脚にあります。私の知っているある指導者は自分の心を排水溝に置いています。もう一人の指導者の魂は土踏まずにあります。歩くと踏み躪るのです。しかし、バイヤー・サーブの魂のありかは誰にも分かりません〉¹²⁾ここでは、魂、靈魂、心は同義語として用いられている。

アストバーンとムフトラールは身分を隠してバイヤー・サーブに面会し、政治的立場、役割を称賛すると、返答はこうである。〈これこそが秘密なんだ。つまり、誰も私を殺せないということだ。自分の靈魂を近くに置いていないんだ〉¹³⁾

2人は一日中、町を歩き回り、さまざまな人々と話をし、コーヒー・ハウスや茶店に座り、居酒屋では酔客たちとことばを交わし、四辻で人々に尋ねるが分からない。疲れ果てた2人が郊外の樹の下で寝入ると、真夜中、樹の上の鳩のつがいが話を始める。〈「おまえはまったく無頓着だ。一日中、どこをうろつき回っていたのだ。あのバイヤー・サーブが自分の靈魂をよそに置いたように、子供たちをほったらかしている」「バイヤー・サーブは自分の靈魂をどこに置いている

の?」「知らないのか? 合同庁舎の首相執務室の椅子があるだろ、そこに大きな白蟻がいるんだ。その白蟻の中にバイヤー・サーブの靈魂が入っているんだよ。その白蟻は椅子をかじり続けている」「とても奇妙なことね。あの人には政敵がとても多いのに。白蟻を捻り潰いてあの人をどうして殺してしまおうとしないのかしら?」「誰にも知られていないのだ。知られたとしてもそこに入るのはとても大変なんだ。昼間は守衛や衛兵がいるし、夜には亡霊たちが踊り狂っている。大臣になれずに死んだものや、選挙に落選したものたちすべてが亡霊となって議場や合同庁舎に徘徊している」「じゃ、そこには誰も行けないわけね」「行けるよ。しかしマントラを知らなければならぬ。マントラで亡霊たちは静かになるんだ」「どんなマントラ? あんた知っているの?」「ああ、勿論さ! そこへ行ってマントラを大声で唱えと、亡霊たちは静かになる——赤い投票箱に! ニワトリ印の投票箱に! ゾウ印の投票箱に! 雄ウシ印の投票箱に! 林野庁長官! このようなマントラを聞くと、亡霊たちは満足して姿を消すのだよ」¹⁴⁾アストバーンは聞いていたのである。

2人は下調べをし、当直予定の衛兵と交渉する。〈真夜中12時に、首相の椅子に挨拶するよう、王から命令されている。占星家たちは、吉祥の時に首相の椅子に接吻すれば民主主義は成功する、といっている〉¹⁵⁾100ルピー握ませることも忘れない。

普通の白蟻より、3, 4倍大きい白蟻捕獲に成功するのである。この瞬間、就寝中のバイヤー・サーブは激痛のあまり七転八倒した。

1957年、ドウルガージャンカル・シュックル (Durgashankar Shukl) は週刊誌『変革』(Parivartan) を刊行した。パルサーイーは、「アリストテレスの手紙、インド在住の子孫に宛て」(Arastu ki chitthi, Bharat nivasi ek vanshaj ke nam) を連載するようになった。1947年より週刊誌『歩哨』(Prahari) に発表されたものと比較すると、文体上の変化が見られ、読者に対する平易な語り口となっている。両誌で扱った学校、教育、失業、恋愛、自殺、政治、宗教、官僚制、汚職、ジャーナリズムなどの問題が、『王妃ナーグパニー物語』に反映されている。

ジャーナリズムの問題を見ることにする。アストバーンとナーグパニーが自殺を断念すると、大勢の取材陣は落胆する。すると、ムフトラールはこう説得するのである。〈このようにも書けるではありませんか。王子と王女が飛び込むと、そこに2輪の蓮華が咲いた。2人はその上に坐っていた。蓮華はどんとどんと

上へ伸び、岸辺に2人を着けると消えてしまった。自殺をしないように、というのが母なるナルマダー河の意向であると2人は理解した。あなたがたはこのような記事を書いているではありませんか。5頭の子供が生れたとか、空から血の雨が降るとか、寺院の天井から牛乳が滴れ落ちているとか、シヴァ・リング急に5インチも伸びたとか、ある遊行者がマントラで死者を蘇生させたとか。自殺中止の記事もこのような奇蹟的なものとなりますよ。これであなたがたの新聞は売れるし、王子も有名になるでしょう>¹⁶⁾パルサーイー自身ジャーナリストとしての自覚からか、このように嘆いている。〈個人、政府、政党の利益に縛られた隷属ジャーナリズムが横行している>¹⁷⁾

次に汚職の問題を見ることとする。ムフトラールは県長官補となり、カレールームキーと結婚する。収賄事件に何度も関与するが、〈女王の幼友達の夫ということで釈放される>¹⁸⁾ パルサーイーは、あの世にいるアリストテレスになって、インドからやって来る汚職関係者を調べ、〈なんと多くのものがやって来ていることか、一人一人が収賄した金額を合計すると、五ヶ年計画の予算と同額になる>¹⁹⁾、と驚き、〈収賄、官物流用、公金横領は、私にとって、呼吸のように自然で不可欠のものとなっている>²⁰⁾、との告白にも接している。

持参金問題についても触れなければならない。「我々の社会における花婿買売」²¹⁾以来、関心の強い問題だからである。アストバーンの父は秘書に、アストバーンの出産からこれまでの衣食住、趣味、娯楽、小遣いを含めた総出費を計算させる。250万ルピー以上である。花嫁側からこれだけのものを回収しなければならないとして、こう断言する。〈男子をもうけることは商売である、家内工業である>²²⁾

最後に、ジョーギー・ブラパンチギリについて述べなければならない。泥棒から強盗になり、強盗殺人容疑で起訴され終身刑を受けた男である。脱獄し、強盗団を卒いて荒し回るが、あるとき聖者に会い、「改心」してしまう。余生を人類奉仕に捧げることを誓い、アーシュラムを経営している。〈社会には多くの女性たちが未婚のままである。家を出て夫を探す勇気がない。その不幸は女性たちをアーシュラムに収容し、ふさわし男性たちと結婚させるのである……僅かな金は受け取るがアーシュラム運営のために必要だからである>²³⁾ ギリはナーグパニー救出を依頼されるが、役は果せない。

『王妃ケートキー物語』は、北インドのラクナウーで1803年頃、執筆され、活

字本が刊行されたのは、1905年、今世紀初頭まで受け入れられていたといわれる。職業的語り手まで登場したとのことである²⁴⁾。

ほぼ150年後、中央インドのジャバルプルで『王妃ナーグパニー物語』は執筆された。インド独立、藩王国統合、州再編成、1952、57年の総選挙と時代は変る。ケートキーのひたむきの愛、ジョーギー・マヘーンドルギルの超能力という物語の世界に魅了されている聴衆ではなく、藩王、会議派政府閣僚、官僚、警察、ジョーギー・プラパンチギリなどの結託を見抜く読者の登場である。パルサーイーは「アリストテレスの手紙」を書くことで文体を確立し、読者たちの語り手となったのである。

- 1) パルサーイーと作品については、田中敏雄「ハリシャンカル・パルサーイーの小説『岸を求めて』」『印度学仏教学研究』第43巻 第1号 65~71頁。
- 2) 使用テキスト：Harishankar Parsai, *Rani Nagphani ki kahani*, Jabalpur, Lokhetna Prakashan, 1971. 以下、RNK と略す。 3) RNK : 5.
- 4) Harishankar Parsai, *Parsai rachnavali 2*. Nai Dilli, Rajkamal Prakashan, 1985, p.13. 以下、PR と略し、巻号、頁数を付ける。
- 5) Harishankar Parsai, *Rani Nagphani ki kahani*. Dilli, Rajkamal Prakashan, [c 1961]. 6) RNK : 68.
- 7) Mahendr Mittal, *Bhartiy Chalchitr*. Dilli, Alankar Prakashan, 1975. pp.339-40.; Ashish Rajadhyaksha ed., *Encyclopaedia of Indian Ciuema*. New Delhi, Oxford University Press, 1994, p.337. 8) RNK : 119.
- 9) Dhirendr Varma et al ed., *Hindi sahity Kosh 2*. Varanasi, Gyanmandal, [1963], pp.468-69.; Muhammad Sadiq, *A History of Urdu literature 2nd*. Delhi, Oxford University Press, 1984, p.179.
- 10) Vrajratndas ed., *Insha, unka kavy tatha Rani Ketki ki kahani*. Kashi, Kamalm-anani Granthmala Karyalay, [1928], pp.87-132. 以下、RKK と略す。
- 11) RKK : 101. 12) RNK : 97. 13) RNK : 105.
- 14) RNK : 107-8. 15) RNK : 113. 16) RNK : 36.
- 17) "Arastu ki chitthi", *Parivartan* (Jul. 22, 1957); PR6 : 39. 18) RNK : 125.
- 19) "Arastu ki chitthi", *Parivartan* (June 1, 1957); PR 6 : 24.
- 20) "Arastu ki chitthi", *Parivartan* (Aug. 5, 1957); PR 6 : 39.
- 21) "Hamare samaj men var vikray", *Prahari* (Jan. 2, 1949); PR 6 : 300-2.
- 22) RNK : 90. 23) RNK : 80. 24) RKK : 10.

<キーワード> Hindi literature, Harishankar Parsai, Satire

(東京外国語大学教授)